

MIOTSUKUSHI

漣標

みおつくし

2001年3月1日発行

No.78

大阪府青年国際交流機構
会長 松本仁孝



CONTENTS

東ア船リポート

世界船リポート

航空機派遣リポート

事後活動(アジア太平洋招聘)

INFORMATION

もう春はそこまで来てる!

東ア船 Report

東南アジア青年の船・参加レポート

川添 賢史

当初の目標と達成度

この事業への参加応募にあたって、応募動機に書いたことと照らし合わせてふりかえってみた。

(ア) アジア各国青年との交流と意見交換

東南アジアへの興味は、米国滞時に自分がアジアの人間であると強烈に印象付けられたことがきっかけになって以来ずっと持ちつづけているものだ。特にハングリーでパワフルなイメージをずっと感じていた。日本国内ではどこか停滞気味な「土気」とか「野望」とかいったものがそこにはあるような感じがした。そうした国・地域に暮らす同世代がみているもの・感じているものを共有できたらこれほど自分にとってプラスになるものはないだろう、というのが私自身の「野望」だった。

そういう意味でも、この事業の参加者は土気熱く実際に実行力のある人が多かった。ディスカッションでは自国の長所と短所をまとめ何が必要かをきちんと述べていたし、ホームステイやルームメイトとの会話からも普段の生活のことから各国の事情までいろいろなことを学んだ。当然、それは必ずしも国を代表して発言しているものではないし、その国の状況を正確にあらわしているわけでもないが、少なくとも自分や自分の国のことを自分の言葉で表すことの難しさを知ったし、それを行動に移せる行動力とバックグラウンドをもっている人の話はとても刺激的だった。

事前の準備と事業内活動

(ア) ジャパン・ディと文化紹介

国際交流活動で日本の文化を紹介してほしいと言われると、これといった特技も教養もない私にとっては一番困ってしまう質問なのだが、今回は事前にしっかり!?練習と打ち合わせをした上での活動ということで、これを機にできるだけ多くの日本文化に触れてみたいと思い、太鼓や沖縄エイサーから南京玉簾・よさこいソーラン・盆踊り・阿波踊り・パラパラまで練習した。当日全部には出られなかったけれど、練習時・発表時ともいい思い出になった。玉簾などいくつかはまたどこかで披露することがあるかも知れないし、楽しみだ。

(ウ) ホームステイと各国活動

各国での短い寄港地活動の中でもホームステイはとても重要だった。忙しいスケジュールから開放されてリラックスできたのと同時に、家族の人の話やテレビやゲームなど普段の生活から感じたことはとても多かった。マレーシアには以前ホームステイの経験があるが、その他の国も思っていたより快適な生活を送ることができ、国によってそれぞれに特徴的でとても興味深かった。受け入れ先にある程度の経済的余裕があるのでホームステイ先がその国の本当の平均水準ではないとしても、町を散策したり、家族との話のなかでその国の雰囲気は感じる事ができた。「東南アジア」という概念は日本および欧米によって住民を無視して勝手に作られた地理的概念であるとはよく言われるが、西と東、大陸国と海洋国ではやはり生活に違いがあるし、一方で都市にすむ人に共通の生活習慣・経済格差というものも感じられた。

政府要人の方々のお話やぎゅーりと詰められたスケジュールの中でこなされた各施設訪問は、日本の代表として派遣されていること、旅行ではなく何かを学んで日本やアジア各国に対しても還元していかなければならないことを感じさせた。この事業では交流のために用意された船内と十分に安全かつ快適に準備された船外での二つの設定された環境があった。これはこれで一つの事業としてしっかりと吸収すべきところはとても多かったし、さらにこれだけでなく本当の生活環境をじっくり学べるような機会へのきっかけとしたいと思う。

はじめに

20世紀最後の年、何か大きな事業への参加をとおしてそういう思いが応募のきっかけになったこの「東南アジア」活動・ボランティア活動等の中でもいちばん多くのことを思う。日本を含め参加各国からの参加青年との交流言葉や文化の上での摩擦や心の中での葛藤など含めつつ再確認することは不可能だけれども、この事業への

(イ) リーダーシップやコミュニケーションを学ぶ

船内での300人以上での集団生活という特殊な環境で活動や生活をすすめていく中でいちばん学んだことは、お互いのコミュニケーションであり、それをまとめているリーダーシップの存在だった。300人の中でも特に目立つ人、おもしろい人、冷静な人、色々なタイプの個性が混在していた。その中で自分をどう表現していけばいいのか、というのはずっと大きなテーマだった。他の国からの参加者との交流はもちろん大きな成果だったが、短い時間のなかで自分自身を表現することもたくさん考えることができたことは得るものが大きかったと思う。

事業の中で一番感じたのは、各所各所でリーダーシップをもって行動している参加者の存在だった。船内活動やゲームにおいて人前でパフォーマンスする人、豊富な知識と語学力でディスカッションを盛り上げる人、グループのリーダーとしてメンバーにいつも気を配っている人、そうした人達の積極性や気配りや行動力には本当に感動したし、自分に対して反省・啓蒙させられることが多かった。

(イ) SG(ソリダリティ・グループ)活動

事前研修にて日本担当になったにもかかわらず動きが悪く、同じ日本からのメンバーの人達にはもどかしい思いをさせてしまったと反省する。一方で、各国からのメンバーの中には本当に積極的な人がたくさんいて議論も進んでいて、ゲームの進め方、司会の仕方、企画の立て方、英語での言葉遣いから人を説得する話し方まで、色々学ばせてもらった。SG活動が船内活動として十分に目的を達成していたかはわからないが、人の交流という点では国の言語や文化を超えて気楽に楽しめる機会だったとおもう。

SSEAYP 2000 に参加して

第27回東南アジア青年の船 上西真理

分にとってなにか大きな飛躍の一步となるようなきっかけを見つけたい。

青年の船」への参加は、これまで私が参加してきた国内・海外での国際交流えてくれたし、またこれからの人生の中でも大きな影響をあたえつづけるだろう。ホームステイ先での家族との交流の中で得たものは、楽しかったことはもちろん本当に数え切れないほどあった。短い期間に詰まったそうした思いをひとつずつ加を通して得たものをこのレポートでできるだけ冷静に見つめてみたい。

(ウ)「国際関係学とはなにか」の実践の場として

大学で学ぶ机上の国際関係学は役に立たない、という言葉が的を得ているかどうかは別として、それぞれの地域や全体としての世界を見るにおいて、その国・地域に住んでいる人の顔が見えることはとても重要なことだと感じる。紛争と平和・人種差別・政治経済格差の問題など国際関係は結局人間関係に帰結するところも多いだろう。本当に必要なことが何かはそこに住む人にしかわからない。そう思うと、作られた機会ではあるけども短い期間に違った国の多くの人に会えたことはとてもいい経験になると思う。

この事業をその時期だけにおわらせず、これをきっかけにしてこれからも交流を続けていけるように連絡をとっていきたい。もちろんそれは人間的な交流だけではなくて、自分のなかで東南アジア各国に対する興味を持ちつづけること、大学での勉強の中で、卒業した後の仕事や普段の生活の中でもできるだけ接触を続けていきたいと思う。

未来にむけて—まとめ—

この事業をとおして学んだことは、単に外国に関する知識だけではない。当地に脚を運んだことで理解も深まったし、その国を垣間見たことで顔の見える関係が作れたことは確かに大きな影響を与えてくれたと思う。ただ、それ以上に多くの違った国の青年とともに集団生活を過ごしたという特殊な環境が自分を見つめる機会になったし、多くの面で私自身を成長させてくれたと感じる。この機会は今これでおわりではなく、新たな機会への大きな一歩であることを認識して、今回出会った人達のいる東南アジアという地域への興味をもちつづけ、交流をすすめていきたい。

K. Kanazawa

この事業に参加できたことは、私にとって本当に良い経験でした。

大学では東南アジア地域研究という学科にいながらも、東南アジア各国の全てを勉強するほどの余裕もなく、専攻のタイでさえ、机上の勉強を超えず、実際のタイを深く理解することの難しさを感じながら、卒業してしまいました。しかし、今回の事業参加により、今までに、人から聞いたこと、大学で学んだこと、本で得た東南アジア各国の情報を、自分自身が経験・体験できるという機会に恵まれました。

様々な思い胸に抱きスタートした生活は、毎日が新たな発見・経験の連続でした。独特な雰囲気を持つ日本丸での生活、各国のホームステイ、異なる生活様式、食文化、風土、宗教、習慣、…。一口に東南アジアといっても、各国独自性を持ち、また類似性を持つことを実感しました。

また、各国の活動で印象に残る思い出の一つが、訪問国でのホームステイです。ホームステイは、その国をより身近に理解できる機会を私に与えてくれました。家族・親戚・友人等様々な人の協力で、私達のホームステイが出来たと思います。ホームステイ先では家族の一員として、各国の日常生活の一部を知ること、その国が有する、習慣、風土、考え方などを、僅かながらも自分の目で見たり、感じる事が出来ました。幅広い世代の人々と知り合うことができ、より多様な見方、考え方を教えていただきました。



一番思い出に残るのは、タイでのホームステイです。ホームステイファミリーは私を家族の一員のように扱ってくれ、11歳と9歳の二人の姉妹は、本当のお姉さんのように接してくれました。タイのホームステイで、初めての経験をたくさんすることが出来ました。朝早く起きてお寺に連れていってもらい、僧侶に托鉢をしたり、観光地でない地元の人が行く水上マーケットに行ったり、普段の生活を教えてくださいました。数え切れないほど、楽しい思い出を作ることが出来ました。

事業を通じて多くの人々と出会い、友達になることができたのは、私にとって一番の宝物になりました。この素晴らしい事業で得た経験を今後の人生に生かしていけるように、新たなことに積極的にチャレンジしていきたいと思っています。

各地で人々の優しさ、温かい歓迎を受けました。各国の参加青年、ホームステイの家族、地元の方々と再会できる日を望みつつ、日本で出来る活動に参加していきたいと思っています。

この事業を支えてくださった全ての方々へ感謝すると共に、事後活動に参加することで、今後も多くの方々とお会いすることを楽しみにしています。ありがとうございました。

第27回東南アジア青年の船事業に参加して

大阪市在住 野口邦茂

このたび、私は第27回東南アジア青年の船事業に日本参加青年として参加することができました。

ここでは、私がこのプログラムに参加して思ったことを述べたいと思います。このプログラムが終わってから約1ヶ月が経ちましたが、私が、今もとても強く思っていることは、このプログラムで出会った友人やお世話になった方々への感謝の気持ちです。その理由は、私がこのプログラムにおいて大変多くの方々によって支えられたからです。

長いプログラムの間には本当にいろいろなことがありました。決して、嬉しいことや楽しいことばかりではありませんでした。むしろ、立場上、辛いこと、悲しいこと、嫌だと思ったことも数多くありました。体調を崩したこともありました。しかし、ともに日本から旅立った日本参加青年はもちろん、船で知り合った東南アジア各国からの参加青年との交流を通じて、時に泣きあい、助け合い、協力し合うことができ、何とかやってきました。そうした友人の中には、国の内外を問わず、常日頃、自分のそばにいて欲しいと思う人も、お互いの力量を認め合い、一緒に仕事をできたらいいなあと思える人もいます。

それだけではありません。ホームステイで私を受け入れてくださったホストファミリーの方々との生活では、人のやさしさ、親切、思いやり、家族の情愛など、私たちが忙しい日常生活に忙殺されているせいか、当たり前すぎて普段忘れてしまいがちなことを思い出させてくれました。また、それらが本当に身にしみました。各国の参加青年やホストファミリーと別れなければならないときには、本当に悲しく涙が出ました。

さらに、私たちの世話をしてくださったローカルユースの方々、関係各国政府機関、にっぽん丸の関係者、諸団体の方々など挙げれば限りないほど多くの方々に私は出会うことができ、支えられたと思っています。このプログラムのスケジュールはかなり厳しかったのですが、普段では決して経験できない環境の中で、人や物、それに日本の社会を見つめ直すことができ、それらのありがたみを痛感しました。

そして、今考えると、あの幸福な時間と空間をみんなで共有できたことは、私の人生において、かけがえのない経験であり、決して忘れることのない思い出となったと思います。

本当に感謝しています。この場を借りてお礼を申し上げます。ありがとうございました。

第27回東南アジア青年の船に参加して

都志 慶子

54日間に渡るアセアン諸国の青年たちとの共同生活は、私にとって驚きと感動の連続であり、大変密度の濃い時間を過ごすことができた。心の底から笑い、時には涙にくれ、悩みを分かち合い、互いに励み、励まされ過ぎた日々は、まさに人生の数年分を圧縮したような空間であり、日頃忘れかけていたときめきを呼び戻してくれた。私にとってかけがえのない日々であった。

このプログラムを通じて一番強く感じたことは、国籍や文化、宗教、年齢の違いを超えた絆である。育ってきた環境はそれぞれ異なるが、みな同じ「人間」であるという共有感を心から感じる事ができた。そして、すばらしい仲間達とめぐり逢い、このかけがえのない瞬間を彼らと共に過ごすことができたという幸運を、本当にありがたく、幸せに思う。

船内では、SG活動、クラブ活動、ディスカッション等の様々な活動があり、時には意見が分かれたり、討論になることもあったが、その中で、互いに相手を理解しようと努力し、友情を育むことができたと思う。

東南アジアは実に多用で、魅力的である。同一国の中にも様々な言語、宗教、文化を持つ人々が暮らしており、みなそれぞれに独自の文化を大切に守り、誇りを持って生きているように感じた。

特に船内での各国の文化紹介に私は毎回魅了され、また圧倒された。東南アジアの青年達は実に自国をアピールするのが上手である。決して嫌味でない彼らの愛国心を美しくも思った。私達日本人は、自国の文化を大切にしなければならないのは当然のこと、もっと自国の文化に誇りを持ってほしいと思う。実際、多くの外国青年から日本文化についての質問を受け、彼らの日本文化に対する評価と関心の高さに驚きと喜びを感じた。

各寄港地でのホームステイも、各国の文化を知る、という点でこのプログラムのすばらしいところである。シンガポールでは、ヒンドゥー文化に触れることができたし、マレーシアでは村の方々に模擬結婚式を挙げて頂き、花嫁衣裳を着せてもらうという機会に恵まれた。また、今回のホームステイ初のベトナムでも、一泊という短い時間ではあったが、その中で歴史的にも貴重な多くの名所に連れて行っていただき、大変印象に残る思い出となった。

このプログラムの中で出会った人々と、たとえ国が違っても「同じ地球上で同じ時代を生きている」という喜びを共有できたことによって、私は生きるということの素晴らしさを教えられたように思う。

船を下りてからが本当の意味での始まりである。この経験をバネに、そしてかけがえのない友情を糧に、新しい一步を踏み出したい。21世紀の日本とアセアンの関係に少しでも貢献できるように。



世界船Report



セミナーとディスカッションについて

黒川 奈々

船の生活の中ではそれぞれの参加青年がそれぞれの方法・内容で意思疎通を図り、共に笑い、悩み、考えた。しかし、共通の課題をじっくりと考え、議論する機会として、セミナーおよびディスカッションはまた重要な機会であったと思う。

セミナーは国内外の大学の教授や国連職員の方を講師としてお迎えし、参加青年は計4つのセミナーを各自で選択、参加する機会を与えられた。開講内容はグローバルリズム、リーダーシップ、日本社会、国際関係論、経済と開発、心理学、日本語と意思疎通、国連、知識経営と多岐にわたった。

ディスカッションは計8回、内容はグローバル・パースペクティブ、国連、ボランティア、教育、環境、人権、芸術とメディア、アイデンティティであった。できる限り各青年が自分の意見を発表しやすいように、また中身の濃い議論を行うべく、参加青年は小グループに分かれて議論をした。

セミナー、ディスカッションともに、各国の参加青年は活発に質問を投げかけ、意見を発表し、必ずしも意見は一致しなかったが、各自が課題についてより深く考える機会を得た。特にセミナーでは、講師に対してでも、意見が異なればはっきりと反論する外国参加青年の姿勢は、日本参加青年にはよい刺激であった。内容についての考え方は無論、意思の表明方法そのものも、それぞれに共通点・相違点があり、参加青年にとっては意義深いセミナーとディスカッションであった。

クラブ活動

近澤かおり

世界青年の船では、クラブ活動の時間があります。

今回の世界青年の船でのクラブ活動は、自主活動とは別として、一人必ず一つのクラブに所属し、逆に言えば他のクラブ活動との掛け持ちはできませんでした。

クラブ活動には、日本文化を伝える「書道クラブ」、英語と同じくらいに船内共通語であったスペイン語を学習する「ホットスパニッシュ」、スポーツ系では「タグラグビー」などの多種多様なクラブ活動の中から私は「ダンスクラブ」に参加しました。

ダンスクラブの目的は「世界各国各地のダンスを体験する」というものでした。その目標のとおりフィジー、トンガ、フラメンコ、タンゴ、サルサ、サンバ、ロシアンダンス、ヒップホップ、ダッチダンスなどを各国参加青年に指導してもらおうとともに、日本人参加青年は「花笠音頭」といった日本の踊りを教えました。最終日には「エキシビジョンデイ」と言う発表会の場があり、そこでダンスクラブは全員で発表できるまでに達し、身をもって世界の伝統文化を吸収したことに感動しました。

帰国した今でも、ダンスレッスンでの課題曲が街中で聞こえてくると自然についステップを踏みたくなってしまふのでした。

Holiday

野本 正美

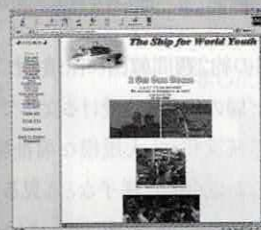
休日は何も公式プログラムのない1日。普段の疲れを癒すべく海を見ながらボーっとしてきたいのですが、そうは問屋が卸してくれません。

まず初めての休日、関西メンバーは通年となっている「酒パーティー」を開催しました。乗船してから毎日集まり構成を練った演目は豊年太鼓のオープニングに始まり鏡開き、各国の代表を選出してもらっての「ビューティコンテスト」、とりは週に2回通って習得した獅子舞。何故か「ビューティコンテスト」は指定したわけでもなく女装コンテストになってしまいましたが、会場は爆笑の渦に包まれました。大成功の内にパーティーは幕を閉じ皆ぐったりしつつも達成感を噛み締めつつハ

イテンションになっていました。休日は唯一PYが自由に作れる時間ということもあり、日本DAY、メキシコの伝統的な祭りなどイベントが目白押し。日頃の睡眠不足解消もままなりません。睡眠不足といえば毎日のように行なわれるパーティ。パーティアニマルの私は全てのパーティに参加!各国の伝統や文化が肌で感じることのできる良いものでした。但し飲みすぎて転ばないように注意は必要ですが。

もう戻ってこないあの素晴らしい世界船での日々。そこで培った友情。私はいつか再び彼らに会える日を楽しみにしています。

ACCESS!

第13回世界船
ホームページ

<http://www.iyeo.or.jp/swy/13/report-main.htm>

ナショナル・プレゼンテーション

後藤聡子

ロシア寄港後から午後の時間を使って始まったナショナル・プレゼンテーション。各国毎にそれぞれ趣向を凝らし、文化紹介をしました。事業を通じてはじめて触れた多くの国の文化。



友人達から学ぶ、新しく鮮明な歌や踊りは、お互いの文化を知り、理解するきっかけを与えてくれたように感じます。

日本のメンバー127名は、「喜怒哀楽」をテーマに、ナショナル・プレゼンテーションの最後をかざりました。につぼん丸に乗船する二ヶ月も前から近隣の付近のメンバー同士で準備をはじめた物もあり、大変見ごたえのあるプレゼンテーションになったと思います。同じ日本人であっても、東北の白虎隊、巫女舞など初めて見るものも多く、日本の文化も幅広さを改めて感じさせられる一面もありました。我々大阪のメンバーは、司会、獅子舞、歌などを努めました。

寄港地 ウラジオストック ナショナルリーダー 岡本光市

9月9日、世界船では初めての寄港地ロシア、ウラジオストックにっぽん丸は到着した。周りには軍艦が多く停泊しており極東の重要軍港としてののにおいを漂わせている。到着した時点では数人しかいなかったが、下船時間になると数百人の大歓迎で、カラフルな風船を持った現地の学生たち、プラスバンドの演奏などで朝の静けさは一転、にぎやかになった。その後私たちは近くのホールで行われる歓迎レセプション会場まで歩くことになり学生たちは勿論プラスバンドと共に、まるで市内パレードの様相であった。町には日本の車が多く見られる、漢字の文字が書かれているバス、テレビで報道されていた日本の中古車がここに来ているのだと実感した。夕方には再び歓迎会が催された。現地芸術大学の教授率いるグループがダンス、歌と次から次と披露、その中に日本語の歌も数曲あった。後で知った事だがその教授は歌手、加藤登紀子さんと友人で、よく日本にも来られているらしい。そして食事をしながらのショー、これもまた休む暇もなく繰り返されるダンスと踊り、イメージしていたロシアとはかけ離れたものだった。



翌日発見したのが「富山ーウラジオストック友好の架け橋」と日本語で書かれた歩道橋である。大阪に住んでいると近くて遠い感じがするロシアも日本とは近く、交流がさかんに行われている事に気付き、再び訪ねてみたい国の一つである。

航空機派遣 Report

歴史を踏まえて私達ができる事

日本青年韓国派遣団一般団員 井上 明日香

私達日本青年韓国派遣団は去る9月27日から10月11日の約2週間韓国に派遣され、首都ソウルの他全州、忠州などの各地方都市を訪れた。キムチ工場やコチュジャン伝統村では熱烈な歓迎でテレビ局の取材も受けるなかで韓国食文化に、民俗芸能体験や国楽観覧または韓国古来の紙造りを体験したり民族博物館や民族村を訪れて伝統文化に、大規模な福祉施設、また、小学校、高校、大学の訪問・学生たちとの交流を通じて現代教育事情等に触れ、ひいては板門店の今なお緊張した様子なども見る事が出来た。その他、ホームステイでは一般の家庭で一日だけではあったがその家族の一員となる貴重な機会を得ることができ韓国のアッパ(お父さん)やオンマ(お母さん)ができたり、忠州湖リゾートでは素晴らしい景観の大自然のもと韓国青年達との共同生活…と短い期間ではあったが私達派遣団は様々な方面において今まで知る事なかった「韓国」を肌で感じられ、それぞれの関心を思う存分吸収出来た有意義な旅となった。

私個人としては在日韓国人が多く生活する大阪で生まれ育ったこともあり、幼少時からこれまでいつでも周囲に「韓国」があり韓国人と接する機会が決して少なくなかった。私にとっては彼らが2種類の名前を有することや家庭で日本語以外の言語を使用していること等は全く自然だった。しかし年を重ねるにつれて自分達が実はその「自然」が「自然」であるのを許容しない社会に生活していることに気づいた。そんななか彼らと係わるうえで何時でも顔をのぞかせる両国間の歴史的事実のうえに聳え立つ高い壁の存在の大きさを常に肌で感じてきたことがあり、研修テーマとして迷わず「歴史」を選んでいた。我々の世代はもちろんのこと親の世代も戦争を知らない。殊更日韓関係においては歴史の教科書にも詳しく記載されていないため学校でも教えてもらえないし記載があったとしても両国の各歴史教科書上の記載内容には開きがあると聞いている。しかしながらその断片だけが今だに我々の隅に根強く残っているためお互いの国に対する偏見や差別も消えていない、のみならず日本に住む韓国人にとって非常に不利な公の制度も残っているという現実がある。そこでより沢山のひと々と語り合い、意見を交換することにより深くお互いを理解しあい、両国間の厳しい現状を少しでも変えられる道を見つけれられたら、と思い今回の派遣に臨んだ。

今回私たちは幸いにも小学生から年配の方まで幅広くいろいろな世代の韓国のひと々と一緒に有意義な時間を過ごすことが出来た。特に韓国青年達と共に過ごした数日間の活動における交流及び討論会は私に国際交流の重要性を痛切に感じさせた。互いに国という大きなカテゴリーをもってみるとやはり歴史や個人感情などの先入観が先行してしまい、それが障害となり関係は前進困難かもしれないが個人として関わりあうとそれが全く違うものになりえる潜在的可能性があるからである。実際今回この事業を通じて知り合った人も含めて私の韓国人の友人の中には個人的に日本人と付き合うまで日本、日本人が大嫌いだったという人も少なくなかった。しかしこのような、小規模ではあるが草の根的活動を

沢山の人が沢山の場所で続けていけば…と考えると両国関係が今よりさらに良い局面をむかえられる日が来るはずだと思う。

「人は何故歴史を学ぶ必要があるのか?歴史とはただの学問ではなく現代に住む私達に二度と過去の過ちを繰り返すことのないように論してくれるものなのだ。私達は正しい歴史を踏まえたうえで個人的な先入観を捨て去り、常に事実に対して問題意識を持ちつづける姿勢を大切にすべきである」、以上は韓国青年たちと話し合った結論である。このような結論を共に生み出したという事実だけでも十分に今回の私達の旅の意義を感じる。



オーストリアを訪れて

育成交流(オーストリア) 田村 貴美子

私にとって、ヨーロッパの旅は初めてであった。大学の山岳部に所属し、山にはまっていた私は、オーストリア＝アルプスであった。看護学生ということもあって、社会福祉の発達した北欧にも興味はあったが、アルプスにはかなわなかった。

育成交流でオーストリアが訪問国となったのは今回が初めてとあって、相手国も受け入れのプログラム作りはかなり気を配ったようである。日本で接待を受けたことのある担当者たちは、日本とオーストリアのもてなしの違いに多いにカルチャーショックを受け、彼らは敢えて“オーストリア流のもてなし方”を試みた。それは、つまり、形式やゴージャスなものにこだわらず、簡素な中にも親密さ、あたたかさを表現したものであった。我々を特別扱いするのではなく、自然に本音で向き合うという姿勢である。とは言え、日本流にも失礼にならないようという“特別な配慮”から、表敬訪問が多いのも事実であった。しかし、我々メンバーの希望もかなり聞き入れられ、国連やUN、OSCEといった国際機関をはじめ、文部省、社会福祉施設、クラシックなどのコンサート、山小屋で一泊するハイキング!

ワインづくめの食事会などがあり、オーストリアの現状を紹介する場としては、東欧との問題が浮き彫りにされた難民受け入れ機関や地元の子供たちが通うユースセンター、伝統のダンスレッスンなどがあった。最終日に行われたフェアエルパーティーも生演奏付きで我々がお世話になった人々を自由に招待しての心温まるステキなもので、印象深い。

また、ザルツブルグではヨーロッパ各地のたくさんの留学生達と共にバスに乗り、小高い美しい山をドライブしながら向かった山小屋風のレストランもロマンチックなものであった。不運にも山頂付近は霧で、さぞ素晴らしくろう街並みの展望はきかなかったが、霧で覆われた夕刻もまた神秘的、感動的であった。

この国に“アルプスの少女ハイジ”的なイメージをあまりにも強くもっていた私は、ウィーンの歴史的な街並みの中で、洗練された近代的な都会の人々の身のこなし方に圧倒され、また、我々メンバーの英語の堪能さと国際的で快活な身のこなし方に面食らい、二重のカルチャーショックに陥っていたのも事実である。ウィーンからザルツブルグと主に都市部に滞在することが多く、息をつまらせていた私はひたすら山々がそびえる見えなき遠きチロルを仰いでいたのであったが、自分らしさを発揮できなかった中で、あまりこれまで意識しなかった弱きもう一人の自分に対面し、自分らしさをもう一度見つめ直す貴重な体験であったことは間違いない。ここで触れ合った現地の人々のもてなしや、我々メンバーの素晴らしい個性が私の心の中で輝き、今後の生き方に大きな影響を与えてくれるであろうと思われる。

中国を訪れて

日中青年親善交流 傍島 万記

皆さんこんにちは。私は平成12年度日本・中国青年親善交流事業(青年中国派遣)に参加しました。団長、副団長はじめ団員30名は9月23日より19日間、北京-武漢-南寧-桂林-上海の5つの都市を訪問し、各都市で熱烈歓迎を受けました。私たち団の総合テーマは「一瞬の出会いを永遠の絆に…共に創ろう私たちの新時代」、このテーマを掲げて日中青年の相互理解と友好のため交流活動を行ってきました。

中国では、朝から晩までスケジュールが一杯の充実した毎日でした。(かなりハードスケジュールでしたが…)さて、一体どういう活動をするのか?皆さんご存知の雄大な万里の長城、天安門広場などの遺跡名勝見学や企業・施設訪問、中国青年との合宿活動など、普通では味わえない貴重な経験ができます。特に印象的だったのは2泊3日のホームステイ、中国家庭料理・太極拳を教わり、ホストファミリーは事前に歓迎の準備をしてくださり、ありったけの中国を私に紹介してくれました。憶えただの日本語で一生懸命交流しようとしてくれたのが印象的です。

また、中国青年との交流では環境問題についての真剣な討論会から恋愛・結婚のこと、今抱えている悩みなど楽しくおしゃべりしました。そこから友情が生まれたことは言うまでもありません!そのおしゃべりの中で「夫婦の家事分担について」数人の方から伺ったものを紹介します。共働きが主で、大半の家庭が男女共に職をもっている中国では買い物から食事の準備まで男性がする事が多いそうです。これはすべての家庭に当てはまるとは思えませんが、家事も夫婦2人の仕事だという認識を持つ社会を少しうらやましく感じました。

さて、中国といえば何千年の歴史を持つ中華料理、毎晩のように催される宴席も文化交流。噂で聞く華やかな宴席を実際に体験できるのも今回の研修の楽しみのひとつでした。次から次へと運ばれてくる色とりどりに飾られた料理がテーブルに並びきらずどんどん上へと積み上げられ、お酒が振舞われます。その中には日本で食べることのない奇妙な食材を使った料理がテーブルに乗る事もあり、食文化、それを食すことになった自然環境の違いを感じさせました。

宴席に欠かせないのが「乾杯」。皆さんは中国の「干杯(乾杯)」の儀式をご存知でしょうか?その名の通り「杯を乾かす」のです。お猪口程度のグラスに60度近い白酒と言うお酒をなみなみ注ぎ、一気に飲み干します。それを幾度となく繰り返し、日中友好酒飲み合戦が夜な夜な繰り広げられていました。(楽しかったですよ。)

食べきれないほどのお料理、たくさんのお酒が最上のおもてなし…だそうです。皆さんも是非華やかな中国の宴席を体験してみてください。

今回この事業に参加し、素敵な出会いがたくさんありました。それは新しい文化との出会い、新しい歌との出会い、新しい世界との出会い。そして何よりも同じ目的意識をもった仲間に出会う事ができたのが最大の喜びでした。

無事終了しました! アジア太平洋青年招聘事業

アジア太平洋青年招へい実行委員会 委員長 稲垣 美由貴

「アジア太平洋青年招へい事業」の実行委員会の活動は昨年5月末にスタートしました。約4カ月の準備期間を経て、外国青年と対面した時はある種の感動を覚えました。が、それまでにはさまざまな葛藤、焦り、不安、そして喜びもあったのです。

私たちがまず準備期間において、手探りで始めたことは日程を決めることでした。これが以外と困難でした。いいアイデアだ、と思えば制限があって出来なかったり、先方に断られたり。最終的には、ATCの見学、天王寺からチンチン電車体験、羽衣での野外炊さん、がんこ寿司での懇親会、ミナミでのボーリング、大阪城見学などそして歓迎レセプション、フェアウェルパーティーも含めた日程が出来あがりました。

これらのプログラムを各担当で分担し、それぞれの作業を進めていきました。ボランティアを続けていると、よく感じることはあるのです。それは準備期間も関わっているほうが充実感、達成感も大きいということです。今回も夏の暑い時期などをはさんでいたのですが、私はミーティングには全回出席しました。(立場上当然ですか?) その分、この事業にも深く関わることが出来た、と自負しておりますし、更には大阪に来る前の外国青年が参加するプログラムである東京のフォーラムにまで参加させていただいたのです。大阪らしいホスピタリティをアピールしよう、と委員一丸となり、外国青年ひとりひとりにグリーティングカードも送りました。これはとても感謝されたようで、私たちも実行委員冥利につきました。

外国青年がいよいよ来阪しました。韓国、ラオス、ミクロネシア、トンガから各5名で合計20名です。上記のプログラムを一緒に過ごしていくなかで、コミュニケーションを手探りで取りながら、お互いの信頼感を築いていきました。各プログラム内容については現在作成中の報告書に任せて、ここでは私の心に残っている外国青年の姿を述べたいと思います。

韓国のメンバーは、焼酎「真露」を一緒に飲もう、と誘ってくれたり、日本語に堪能なメンバーは将来の夢、なんかを話してくれました。互いの共通語に困難したラオスのメンバー。とてもシャイでなかなか打ち解けてくれなかったのですが、今でも時々メールをくれたり、仏教徒にも関わらず「メリークリスマス」とカードを送ってくれます。

そして手紙の最後にはいつもyour best friendと書いてくれます。ミクロネシアのメンバーとはあまり話すことが出来ず、これが私の今回の反省点です。彼らが帰国後、メールのやりとりを一度しました。トンガのメンバーはとてもひとなつこくって、彼らのことを思い出すと今でもつい笑みがこぼれてしまいます。大きな体と優しい心を持ち合わせた南太平洋の友達が私も大好きです。そして今でもメールが時々来ては「大阪が恋しい」と言ってくれるのです。

コミュニケーション能力は語学力には比例しない、と思います。「伝えたい」何かを持つこと。これがまず大切なこと。そしてそれに必要な語学力、交渉力、ユーモア、などを持つよう少しずつ自分を磨いていけばいいのだから、と自分に言い聞かせ、この実行委員会にも関わってきました。この事業に関わり、大阪と外国にすばらしい友人に出会いました。これが私の財産であります。この財産はきっとあなたにもお分けすることができるでしょう。2000年の「アジア太平洋青年招へい事業」は終わりましたが、関わったみんなに、いろんな種を蒔いていきました。近い未来に大きな花が咲くことを祈りつつ、これからも国際交流活動に関わっていこう、と期待に胸膨らませております。

クッキングコミュニケーション

韓国人と台湾人の講師をお招きして母国の料理を紹介し、お互いの文化交流を会話を交えながら楽しみます。
(今現在もう一人の講師を探している最中)

日時 3月18日(日) 13~17時
場所 クレオ大阪南(喜連瓜破)
参加費 2000円
締切り 2月22日(木)

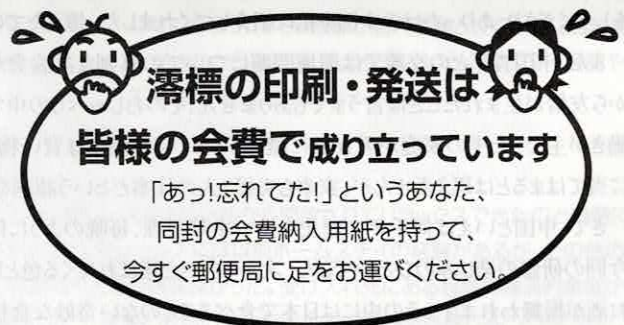


大阪市平野区喜連西6丁目2番33号
TEL 06-6705-1100 FAX 06-6705-1140
前が、スーパーマーケット「イズミヤ」です
詳しくは
http://www.creo-osaka.or.jp/about/03_minami/index.html
問い合わせは松本まで 090-8147-6822

事業説明会&帰国報告会

来年度の事業説明会を帰国報告とともに説明致します。
3月11日(日) 午後2時~5時
大阪府青少年会館3階研修室

問い合わせは松本まで 090-8147-6822



青春後記

先日久しぶりに世界青年の船の仲間が集まった。青年の船でインド・スリランカ・ミャンマー・シンガポールへ行ったのは19年前になる。随分月日が経った(歳がばれた?)。一緒に乗ったインド人の友人が来日しているというので会いに行った。日本では情報があまり手に入らないので、インドの大地震のことを聞いた。彼は政府の役人なので情報が入る。インドプレート全体が揺れたということだ。おそらく死者は10万人にのぼるだろうとのことだった。直接の被害の他に、食糧、病気、住居等々、問題は山積している。神戸の地震のことを思い出す。多くの国の人々に助けられた。現地はどれだけ大変だろうと思うと、じっとしてられない気持ちだが、仕事を持っている身では何もできない。せめてお金集めぐらいやろうと思い、会社に募金箱を置いた。IYEOでも組織として何かできることはあるはず。皆さんのご提案をお待ちしています!

T. OH! NO!